

企画展を終えて

戸田 恭司*

このたびの企画展「東日本大震災から1年～釧路と地震災害」（2012年2月18日～4月8日）は年度当初には企画されていなかった事業である。開催のきっかけは、当館友の会会長の中塚美恵子さんが描いた油絵であった。

詳しくはすでに述べられているので繰り返さないが、市のハザードマップでは津波の想定がされていない地域にお住まいの中塚さんが、実際にやって来た津波を目の当たりにして事実を正確に伝えようと行動された。結果、2枚の絵となったのである。

この絵をきっかけに、大震災を振り返る展示の企画を主に2名の職員で進めた。地震のメカニズムといった基本的なことがらや過去の地震災害を紹介するとともに、人々がどのように大震災と向き合ってきたか、人々の言葉から見ていくという構成を考えた。

前者について、地震に関する情報はもともと当館では持ち合わせていないことから、これらは釧路地方気象台へ協力依頼し、展示の前半でパネル紹介することとなった。大震災以後、にわかに関心が高まってきている津波堆積物については、北海道教育大学釧路校の境 智洋准教授の協力を得て、道東における堆積物標本を解説を交えて紹介した。

一方、市総務課防災危機管理担当の協力を得て、あらたに作られた津波ハザードマップと市内の被災状況写真を紹介し、さらに釧路新聞社並びに市消防本部（市防災センター）の協力で、ここ60年間の主な地震による市内の被災状況写真もパネルで紹介した。

後者については、被災地へボランティア活動がされた方々の話を中心に紹介した。もともとなったのは、被災地でボランティア活動を行う人々をサポートし続けた市内のNPOがまとめた証言集であった。中でも、市内の高校野球部員が全員被災

地へ赴いた記録には、彼らの素直な言葉が並んでいた。

展示だけではなく、地震について市民に知っていただく講座のようなものを開催できないか。この提案には気象台と教育大の協力を得られ、模型を使って津波並びに液状化を体験する関連講座も開催した。津波を発生させる模型を職員自ら開発した気象台と、身近なものを使って液状化を教材とした教育大学。それぞれの専門を生かした内容は、小学生から一般に至るまで十分に理解できるわかりやすいものであり、開催日が3月11日ということも相まって予想以上の市民の方々に参加していただいた。

冒頭で述べた2枚の絵は、報道機関にも大きく取り上げられ、ご本人も何度も紹介された。「記録するということを博物館で教えられた」と語っておられたが、その言葉にハッとさせられた。博物館として大震災を記録する意識が希薄だったことに気づき、恥ずかしい思いをした。また、今回の企画が準備に十分な時間をかけられず、練り上げられた企画にまでは至っていないことも反省材料である。

展示が終わって半年あまり。恥を恐れずに言えば、「大震災」というテーマで各機関が各々行う啓発事業を、市民の協力を得て博物館という場所を共有してコンパクトに行い得たのが今回の企画展ではなかったか。市民にとっても、地震に関する可能な限りの情報を1ヶ所所得る機会となっていたとしたら、うれしく思う。各機関並びに市民から、博物館は情報発信の場であると認めていただくことで、さらなる発信につながっていくのではないか。

重要なことは、情報のアンテナをやみくもではなく、より効果的にもっと広く巡らせていく意識をわれわれ職員が普段からどれだけ高めていけるかにかかっていると思われる。心していきたい。